

『社会学の射程：ポストコロニアルな地球市民の社会学へ』（東信堂, 2008）

は し が き

「ポストコロニアルな地球市民の社会学」という問題提起をしてから、5 年以上の月日がたちました。

この間、世界のポストコロニアル性はますます明瞭になってきていると思います。アジア・ニーズから始まったアジアの経済発展は、東南アジア諸国連合(ASEAN)から中国におよび、さらにインドにも波及して、今や東アジアから南アジアにかけての地域は世界でももっとも躍動的な地域となっています。アメリカの証券会社から出された BRICs すなわちブラジル、ロシア、インド、中国という問題提起は、むしろまさにその正反対すなわち中国、インド、ロシア、ブラジルという順序でなされるべきであったようにも見えます。

旧植民地出身の知識人からなされたポストコロニアリズムという問題提起の核心には、現代欧米の思想が、西洋への自己批判をふまえて世界の広がりや将来を見極め尽くしているような自意識にもかかわらず、自らがかつて植民地として思うままに支配した諸社会の深層にはまだまだ入り込んでおらず、未発掘の諸問題を視野に組み入れえていない重大な限界をもっている、という批判がありました。そしてこの批判は、日本を含む欧米の「先進」諸国にもまた、「先進」という自意識にもかかわらず、自らの内部にまだまだ未発掘の諸問題があるのではないか、という追及をも含んでいました。21 世紀に入って欧米の「先進」諸国でいっせいに顕在化してきたワーキングプアや介護労働力不足や無差別殺人犯罪などの諸問題は、まさにそういう追及がますます妥当性をもつようになってきている証左のようにも思えます。

こうしたなかで、地球市民たるべく、これまでの社会学理論の流れを整理総合し、それらをふまえて新しい社会学とそれによる現代社会の分析、さらにはそれをふまえた実践社会学を書こうとしているうちに、5 年以上前の問題提起のさいにたまたま掘り起こしてきた私自身の処女作がますます気になってきました。何度か読み返しているうちに、それらのなかに、ここ半世紀ほどの世界の激動と現代思想を含む社会学諸理論の展開をつうじて確認されてきたものが、若木らしく素朴ながらそれだけに大胆な形ですであつたようにも思えてきたからです。人間がシンボリズムをとおしてしか世界に生きられないこと、したがって社会における争いは暴露合戦を含む思想の争いにほかならないこと、それゆえ社会の把握は（相互）思想状況という、今日の言葉でいえば言説合戦をつうじてしかなされないこと、20 世紀後半以降の歴史は長い眼でみれば旧植民地・従属諸国の主導でつくられていくであろうこと、などです。

考えた末、私は、2 つの処女作を含む社会学論をまず刊行しなければ、と思うようになりました。社会学理論の流れの整理総合も、理論・現代・実践という社会学の完成も、それをやっておかなければ良く理解されないように思えてきたのです。5 年以上前の問題提起の概要を生かし、その当時書いた短いエッセイを挟んで 2 つの処女作を配置したうえで、私が今どのように自分の社会学をまとめようとしているのかを書いてみようと思いました。処女作は、今日の時点から手を入れ、不適切な表現を直すとともに注や文献のあげ方などを変えていますが、内容はほとんどそのままです。こういう卒業論文や修士論文が珍しく

なった現在、あらためてそれらのあり方を考え直すためにも、これらは公表しておいていいような気もしてきました。

「地球市民の社会学」といいましたが、もちろん今日の世界に地球市民どころではない諸問題が溢れていることは承知のうえです。しかし、非西洋すなわちアジア・アフリカ・ラテンアメリカに先駆けて乗り出した近代化のあげく、15年戦争について第二次世界大戦の半分を引き起こし、近隣諸国に多大な危害を加えたばかりでなく、自らも沖縄を犠牲にし、大多数の都市を爆撃にさらしたうえ広島・長崎に原爆を投下されて、結果として徹底平和主義の憲法をもつことになった日本国の市民としては、それ以外の生き方はありえまいと私は思っています。

処女作を思い返し、そこからこの半世紀の世界の激動と諸理論の展開を見直しつつ未来に向けて射程を広げてみることで、理念的である同時に現実的な社会学の新しい行き方も見えてくるのではないかと。そう思いながら、そのために残された生命力のすべてを捧げようと思っている社会学者の、これは、あらためてする序論です。

本書は、2003年3月におこなった、私の東京大学での「最初講義」とその前後に作成した資料を基にしています。これらについて、当時の社会学研究室のスタッフを始め、大学院生および学部学生の皆さんにたいへんお世話になりました。あらためて厚くお礼を申し上げます。

また、本書Ⅳの原稿の手書きからの入力にかんしては2003年3月まで私の秘書役を務めてくださった川端眞知子氏、本書Ⅰの原稿の録音からの起こしとⅢの原稿の手書きからの入力にかんしては、2004年4月以降私の秘書役を務めてくださっている井上久美子氏にたいへんお世話になりました。井上氏には、ⅢとⅣの準最終原稿と元原稿との照合もお願いしました。お二人のきめ細かなお仕事がなかったら、私一人ではとてもこの本はできなかったと思います。心からお礼を申し上げます。

最後に、これがもっとも重要なのですが、東信堂の下田勝司氏には、この、著者から見れば独創性に自信があるものの、見ようによってははなはだ型破りの、本の出版を快く引き受けていただきました。氏の大きな心意気にかなうよう、生命あるかぎりよい仕事を続けたいと思っています。

2008年11月
著者

目 次

はしがき i

I ポストコロニアルな地球市民の社会学 3

1 社会をとらえる

総体把握 3 「仲間の数を数える」問題 5 懐疑、批判、還元 7 身体から出発 9 言語の問題 10 言説する身体群のなかへ 11 内側からの、自分の問題としての、近代（資本主義）社会の把握 12 西欧（西洋）の徹底した自己批判 14

2 ポストコロニアルとは？

多様な流れ 17 3つの主要な淵源 17 西洋的視座の脱構築 20 「先進」社会の人間には無縁なのか？ 23 女性を媒介に広がるインターナル・コロニー 25

3 新帝国か、地球市民社会か？

グローバル化とは？ 27 構築され直されつつある身体 29 新帝国か？ 32 地球市民社会か？ 34 帝国と市民社会の弁証法 36

4 まず日本市民になる

国民ではなくて市民に 37 歴史認識の問題をとおして 39 セミコロニアルな日本人 40 日本市民からポストコロニアルな地球市民へ 43

II 〈火の鳥〉を追って 47

III 人間における思考と思想 49

序 現代の思想的課題 49

思考と思想 49 思想家と大衆 50 大衆の蜂起 50 思想への逃避と思想からの逃避 51 思考と思想の再定位 52 問題の系列的設定 52

1 人間の、思考と思想の現状 52

思考の発生的原型 53 実用的思考 53 哲学的思考 53 科学的思考 54 自然から社会へ 55 暴露的思考 55 知識社会学へ 56 インテリゲンチヤに根ざした相關主義 56 脱政治化とインテリゲンチヤの退行 57 思考と思想の根本的反省 58 科学的思考と暴露的思考の不調和 58 芸術的思考および思考の論理的原型 59

2 人間的思考の論理的原型	59
シンボルの役割	59
世界内存在へ	59
思考をとおして	60
世界内存在よりも世界観内存在	60
世界観と世界像	60
距離化と自己疎外の弁証法	61
神話的思考	61
根源追究的思考	62
信仰と懐疑の循環	62
現象解釈的思考——デカルト	63
現象解釈的思考の限界	63
構成的思考としての芸術	64
芸術的思考の限界	65
実践的思考と歴史(観)	65
基礎としての労働	66
根源追究的・現象解釈的・構成的思考としての実践的思考	56
3 実践的思考の論理と課題	67
人間であろうとすること	67
人間的思考と思想の混乱	67
類的存在としての人間	68
1) 思想の科学	68
実践的思考の思考方法	68
思想の主体	69
思想の基体	69
思想の機能——経済・政治・教育	70
思想の全体的過程	70
2) 思想史	71
思想の科学的把握——主体性・社会性・歴史性の吟味	71
認識関心と思想史	71
思想の科学的構成	72
3) 社会的実践	72
実践的思考と社会的実践	72
4 今後の課題	73
思想史とその方法	73
諸科学の総合	73
弁証法的唯物論と論理実証主義	74
自然から社会と歴史へ	74
非合理生の発見	74
社会科学方法論の追究	75
IV 社会的人間の思考と思想	83
序 「現代」の思想的課題	83
「世界史」の成立	83
「西欧の没落」	85
世界政治の両極化	87
非西洋「諸国民」の台頭	92
問題はなにか?	93
原理と方法の探求	96
1 社会的人間の思考の原理	98
1) 思考の機能	98
意識的存在としての人間	98
動物心理学の思考実験	99
ケーラーの実験と見通し	100
人間的思考の発生的原型——問題解決	102
象徴的思考	104
人間文化の現象学——カッシーラー	105
世界観の構成	108
人間的思考の論理的原型	109

2) 自然と社会 110

日常生活的思考・形而上学的思考・科学的思考 110 魔法からの解放と形而上学の完成 111 デカルトの思考——解析幾何学による世界内定位 113 イギリス経験論からカントをへてヘーゲルへ 117 市民社会を介しての社会と歴史の対象化 119

3) 実践的思考 121

フォイエルバッハを介してマルクスへ 122 労働——類的存在としての人間の対象化 124 人間と自然の統一としての社会と人間の自己疎外 126 実践的思考 127 もう一つの実践的思考——プラグマティズム 128 デューイ——習慣と慣習を衝動と知性で変えていく 130 社会経済学と社会心理学——断絶の発想と連続の発想 134

2 思想の科学の構想 136

1) 思想の科学 136

人間の思考と思想を総体的にとらえる 137 先行科学としての知識社会学 139 マンハイムからマートンへ 140 知識社会学と認識論——相関主義 141 知識社会学の「経験科学」化 143 思想の媒体・基体・主体 145 思想の動態から思想状況と思想史へ 147

2) 思想の媒体 148

シンボルと思想の形態 148 分析枠組化と認識論の滑落 151 哲学問題の非問題化——数学と自然科学のみ 153 ランガーの現示的シンボル体系論 156 意味論から記号論へ——社会的言語の有意味性 158

3) 思想の基体 160

思想の基礎としての社会生活 160 マルクス——思想の基体の発見 162 市民社会と思想——土台と上部構造 164 社会経済学的アプローチ 166 フロイトの精神分析——基体としての無意識 167 デューイ——基体としての習慣と慣習 168 社会心理学的アプローチ 170 マンハイム——階級から社会集団へ 171 マートン——受け手または公衆へ 172

4) 思想の主体 174

近代思想の主体としての個人 174 マルクス——ブルジョワジーからプロレタリアートへ 176 マンハイム——集団からインテリゲンチヤへ 178 マートン——認識論の放棄と科学の社会学 182 ミルズ——無力で無気力な知識人 183 イデオロギーの終焉とアジア・アフリカ・ラテンアメリカの諸民族 185

5) 思想の動態 187

思想の主体から動態へ 187 断絶の発想と連続の発想——革命と教育 188
マンハイム——インテリゲンチヤと政治教育論 189 思想の動態としてのイデオロギ
ーとユートピア 192 ラスウェル——象徴過程としての政治 195 世界革命の中
心と伝播——世界革命の現象学 197 植民地革命と非西洋諸国民の台頭 200

6) 思想状況と思想史 201

媒体・主体・基体・動態の連関 201 実存主義の状況概念 202 レヴィン
の生活空間——三段階の分析 202 社会的場の理論の積極的意義 205 思想状況
と経済・心理・論理・社会過程 208 思想状況の分析——シンボル分析・視座の摘出・
基体への還元・動態分析 209 思考と思想の実践過程——客観性の問題 212 思想
状況から思想史へ——日常生活と歴史の媒介 214

注 217

V 社会学の射程 225

1 相互思想（コミュニケーション）状況へ 225

〈火の鳥〉の意味 225 「思考と思想」と言説する人間 226 歴史による審
判の厳しさと正しさ 228 問題解決と世界（観）構成の実践的媒介 229 思想の4
つの契機：媒体・基体・主体・動態 230 思想状況と思想史：状況（ミクロ）と歴史
（マクロ）の媒介 232 相互思想（コミュニケーション）状況へ 234

2 総合の精神から構造と主体のポストコロニアルな媒介へ 237

日本社会科学史から現代社会分析へ 237 社会学と社会主義の対抗関係 239
総合の精神による社会理論の基礎構築 240 社会学の独立と科学と意志の問題 242
世界革命と主意主義の功罪 244 構造と主体のポストコロニアルな媒介へ 247
日本社会学の源流・挑戦・展開 250

3 社会の共同性・階層性・システム性を生態系に定礎しなおす 251

共同性と階層性の相克としての社会 251 社会システムと宗教・国家・市場・
都市という装置 253 社会システムとしての帝国と市民社会 255 現代地球社会
の諸問題と社会の生態系内在性 258 理論社会学・現代社会論・実践社会学 260
地球市民学、およびカギとしての地域と社会意識 262

文献 265

索引 281